
或る奇妙な友情

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る奇妙な友情

【Nコード】

N5192A

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

次の日曜、俺は人を殺す事になったーガキの頃から続いた力関係。同じくらい狂っている広樹と雅也は健にクラスメイトの殺害を命じた。逆らえば死ぬ。受け入れれば豚箱へ。選択の余地ー何処にもなかった。健は二人を憎みながら、脱出不可能の迷宮へ墜ちていくー。

或る奇妙な放課後

今度の日曜、人を殺す事になった。ジャンケンで負けたからだ。俺はグー。広樹と雅也はパーを出した。口裏を合わせたに違いない。俺が勝ったら、その勝負はきつと無効になっていた。

広樹と雅也は同じくらい頭が良くて腕っ節が強かった。そして同じくらい狂ってた。俺は頭も腕も並だった。だから人を殺す事になった。

「解ってるな？遠藤に告ったら、いつもの公園に連れてくるんだ。包丁で脅かしたら、その場で犯せ。犯したら殺す。簡単だろう？」

放課後の教室で広樹が面白そうに笑って言った。

広樹の隣で雅也は煙草をふかしてた。窓から夕陽が射し込んで、煙を照らしていた。やけに神秘的に写った。

「何ぼーっとしてるんだよ健」

雅也の声ー気だるそうだった。煙草を床に踏みつけて、俺の肩を叩く。

「そんなん成功するか？解ってるよな？失敗したら…」

俺の腹に雅也が触れた。学ランの下、裸の腹筋には四針縫った十字架型の傷がある。広樹が横、雅也が縦に付けた。

「こっから内臓取り出すぞ？」

雅也の笑顔。ぞっとした。比喻ではなかった。

俺は拳を握り締めた。雅也を殴る。その後で広樹を殴る。頭にいつものイメージが沸く。実行ー出来る筈なかった。やればこの場で俺が殺られる。想像で満足するしかなかった。

「雅也、あんまり健をいじめんな。こいつは怒るとすぐに泣く」

広樹の声。小学校を卒業するまでは泣いた。中学を卒業する頃には泣かなくなっていた。高校二年の今となっては涙の存在を忘れていた。

俺の中にあるものー広樹と雅也に対する憎しみだけだ。

「とにかく日曜日だよ、健。しくじったらお前は終わりだ」

雅也が煙草に火を点けた。扉が開く音。見回りの教師が俺達を見ていた。雅也は煙草を隠す事なく、教師を睨みつけた。広樹―雅也から煙草を受け取り火を点けた。それを俺に渡した。

「せっかくだから、健も吸えよ」

煙草は苦手だ。俺は断った。断りきれなかった。俺は吸った。咳き込んだ。

「先生、何か用ですか？」

広樹が言った。

「俺達、健に無理矢理煙草吸わされてんすよ」

雅也が言った。

「本当か、杉浦」

教師が俺の名字を呼んだ。本当じゃない事など解りきっている筈だった。

広樹と雅也の視線。肯定を促す。俺の意志―否定を促した。

「本当です」

視線に負けた。拳を再び強く握った。

「明日、職員室に来なさい」

教師が扉を閉めた。牢獄の閉まる音がした。

初恋の変換

帰り道で遠藤に会った。遠藤は俺と同じ団地に住んでいる。

広樹と雅也、俺と遠藤。小学校から今までずっと一緒だった。

遠藤加奈子。俺の初恋の相手。広樹と雅也の初恋の相手。二重ではつきりした目。艶やかな唇。白というより純白の肌。長く、繊細な髪。ガキの頃から遠藤は妖艶だった。

「健」

遠藤が声をかけてくる。俺は聞こえないふりをした。

「健ってば」

遠藤に肩を掴まれた。振り返った。

「シカトはないんじゃない？」

商店街の一画。遠藤は買い物袋を下げていた。今日の夕食。父の食事を遠藤が作っていた。遠藤の家には母がいない。中学三年の時、殺された。犯人は捕まった。真犯人は捕まらなかった。

真犯人ー広樹と雅也。俺以外にそれを知ってる奴はいない。

「気付かなかったんだ」

「いつから平気で嘘をつける様になったんだろうねえ、健君は」

「考え事してたんだよ」

「何？恋でも始めちゃったわけ？」

「お前には関係ないよ」

関係あった。俺は遠藤を殺す。次の日曜。今日は木曜。三日後だった。

「つれない事言わないで、おねえさんに相談しなさい」

遠藤が買い物袋を俺にぶつけながら言った。携帯が鳴った。ディスプレイの表示ー広樹。

遠藤がそれに気が付いた。顔に不穏が宿る。俺は通話ボタンを押した。

「はい」

「健、遠藤を殺すのは日曜だ。今勝手に殺る気じゃないよな？」

愉快そうな広樹の声。背後に視線を感じる。振り返った。遠藤の死角、商店街の出口の角に、広樹と雅也を見つけた。俺を尾けていた。「解ってるよ」

「だったらいいが、変な事企んでると、お前が先に痛い目見る事になる。友達を痛い目に合わせたくないんだ」

雅也の笑い声が聞こえた。

「解ってる。これは偶然なんだ」

「ならいい。また明日な」

通話が絶たれた。隣で遠藤が心配そうな顔をしていた。俺は歩いた。家の方向―広樹と雅也の反対方向へ。

「健、大丈夫？まだ、広樹と雅也……」

俺は遠藤を睨んだ。遠藤は黙った。胃がむかむかした。

二週間前、広樹が遠藤に告白した―ふられた。

一週間前、雅也が遠藤に告白した―ふられた。

遠藤が二人をふった理由。

遠藤は俺が好きだった。俺の初恋―憎しみに変わった。遠藤が二人をふらなければ、どちらかと付き合っていれば、俺の事を好きだと二人に言わなければ―。

俺が遠藤を殺させられる理由も無かった。

広樹と雅也

家に帰る前に煙草を買った。広樹と雅也が好んでいる銘柄だった。団地の広場―ライターが落ちていた。拾って煙草に火を点けた。咳込んだ。もう一度吸った。咳込んだが、苦しさが薄れていた。

家に帰った。お袋に煙草臭いと怒鳴られた。うるせえと怒鳴り返した。部屋に入った。ベッドの上―頭を使った。

俺と広樹と雅也。そして遠藤。小学校から一緒だった。ガキの頃、広樹と雅也は仲が悪かった。お互いの口癖―

「あいつは俺より弱いのに調子に乗ってるんだ」

俺もそう思うだろう？口癖の後で、必ず広樹と雅也は俺に言った。俺はいつも曖昧に頷いていた。広樹と雅也は俺を取り合っていた

小学校五年の夏。

地元の河川敷で広樹と雅也が大きな決闘をした。敗者は勝者の下僕になる。ルールはそれだけだった。俺と遠藤が立ち会った。殴りあい、蹴りあう。ガキの喧嘩には見えなかった。広樹と雅也の喧嘩は、プロ同士の格闘技の試合の様に、動きに一切の無駄が無かった。ガキ特有のガムシヤラさが無かった。遠藤は泣いた。

「二人を止めて」

俺に懇願した。

俺―動けなかった。

広樹と雅也はお互いに口や鼻から血を流していた。目を腫らしていた。

広樹が雅也を殴る。

雅也が広樹を蹴った。

全くの互角。こいつらはお互いに死ぬまで殴り続ける。俺は本気でそう思った。

均衡を破ったのは広樹。短パンのポケットからカッターを取り出した。安っぽい刃。それでも刺せば血は流れる。広樹は勝ち誇った

笑みを浮かべた。

「どうする雅也？俺は刺すよ？知ってるだろう」

雅也が呆然とカッターを眺めた。その後笑った。

「嫌になるぜ広樹。考えてる事も一緒じゃねえか」

雅也が短パンのポケットに手をつ込む。カッター。安っぽい刃。どちらか、あるいは両方死ぬ。俺は本気でそう思った。遠藤が口を押さえた。悲鳴。広樹と雅也が同時に遠藤に視線を移す。

「遠藤が叫ぶと、人が来ちゃうな」

広樹が言った。

「ああ、それは不味いよな」

雅也が言った。

二人はお互いの視線を元に戻した。

「引き分けだな」

二人が言った。合図無しに、二人は同時にカッターを捨てた。何故か二人とも笑っていた。

遠藤に今日の事は一切他言無用と、広樹と雅也が釘を刺し、俺を含めた三人で家に送った。

その後、俺は再び広樹と雅也に河川敷へ連れていかれた。

「引き分けつてのもつまんねえよな」

雅也は俺を見ながら言った。

「そうだな。俺達はお互いを下僕にしようと闘った訳だからな」

広樹も俺に視線を移した。背筋に悪寒が走る。

「知ってるか雅也。健はよく、お前の悪口を俺に話してた」

俺は目を反らした。広樹は何を言っている？

「そりゃ奇遇だ。俺も広樹の悪口を健から聞いた事がある」

二人の視線が俺を追ってくる。夕焼けが二人の影を俺に被せるように投射した。動く事が出来なかった。

「健、お前意外と天邪鬼なんだな」

雅也が近づいてくる。痣だらけの顔。瞼に焼き付いて、今尚離れない悪鬼の顔。

雅也に続いて広樹。二人の悪鬼が俺に迫ってくる。

「雅也。勝負は引き分けだ。でも賞品は分けないか」

「お前の事は大っ嫌いだかよ広樹。考えてる事はいつも一緒だ」
広樹と雅也。目を合わせた。笑った。

逃げる。

ガキなりの防衛本能が俺の頭の中に響いた。背を向け、走り出そうとした。無駄だった。雅也に髪の毛を捕まれ、そのまま引き倒される。仰向け。頬に痛み。雅也の拳がめり込んだ。

「どこ行くんだよ健？」

鼻に衝撃。鼻水がとめどなく溢れた。勘違いした。鼻血だった。

「健、今日からお前、俺達の下僕だ」

雅也が俺の体に跨った。もがいた。痛みが加わるだけだった。もがくのを止めた。

「奴隷には、印が必要だろう、雅也」

側に立っていた広樹。俺達から離れ、地面を探りだした。何かを拾った。

安物の刃！。

恐怖が体中で暴れた。叫んだ。雅也に殴られ、口を塞がれた。鼻血のせいで息が出来ない。苦しい。しかし、そんな事はどうでもよかった。俺の意識は広樹の持つ安物の刃にしか反応していなかった。

「雅也、健の腹を出してくれ」

「お前の言う事なんか聞きたかねえが、それは俺も賛成だ」

雅也が俺のシャツをめくる。裸の腹が空気に触れた。恐怖が倍増した。

「いい子だから静かにしなよ健。動くと痛い」

広樹は笑ってさえないなかった。

「これから、お前に印をつける。俺と雅也の下僕の印だ。友達だった健とは、今日でお別れだよ」

腹に痛み。屈辱も恥辱も無かった。俺はカッターで腹を裂かれても、広樹と雅也を呪う事すら出来なかった。恐怖だけが、この時、

体中を蛇のように這いずり回っていたー。

苦悩と諦め、閃きへー

金曜の授業は全く耳に入らなかった。結局、いい案が浮かばない。広樹と雅也は最後尾の席に隣合わせに座っている。俺は中盤。遠藤は最前列だった。

遠藤を殺さないと、俺は広樹と雅也に殺される。

遠藤は俺の事が好きだった。

広樹と雅也は遠藤の事が好きだった。

俺は全員が憎かった。

腹の傷の一件以来、文字通り俺は広樹と雅也の下僕になった。傍目には、あるいは仲の良い三人組に写ったかもしれない。

広樹と雅也は周到だった。誰かに俺に対する暴力を見せる事はない。ただ、何となく気付いている奴はいた。それだけだった。

殺される。

殺す。

二つの選択肢。どちらも糞だった。殺されれば糞みたいな人生が糞まみれで幕を閉じ、殺せば糞みたいな人生が、さらに糞にまみれるだけだ。

広樹と雅也は前に人を殺している。遠藤の母だ。俺はそれを見ていた。

共犯者。

広樹と雅也はその時俺にそう言った。俺に逃げ場など何処にもなかった。

放課後、広樹と雅也と共に地元のゲームセンターへ言った。

二人はパンチングマシンに興じた。広樹が3ポイント雅也を上回る。ふてくされた雅也は便所で俺の腹を三度殴った。

吐いた。俺の人生は糞だけでなくゲロにもまみれてる。

拳を強く握った。ありったけの憎悪を込めて。雅也に睨まれた。憎悪は簡単に恐怖に食われた。

「そろそろ日曜日の段取りを考えようか」

帰り際に広樹が言った。

「そうだな。健が豚箱入んのはいいけど、俺達までばれちゃった話にならねえ」

「問題は死体をどうするかだ」

「それなんだよな」

「色々考えたんだが、一つ面白い方法を思いついた」

「聞かせろよ広樹」

何も考えなくなかった。何も聞きたくなかった。俺はただ歩いた。俺の人生―糞とゲロの上を。

「…相変わらず最高に狂ってるじゃねえか広樹」

「お前だって、その内思い付いていただろ雅也」

「どうだかな。そこまで頭回らねえぞ俺は。おい健、聞いたか？最高じゃねえか？おい健。てめえ何ぼーっとしてんだ！」

頭をこづかれる。我に返った。

「てめえ、何も聞いてなかったのか？」

聞いてなかった。

「ごめん」

膝を蹴られた。本気ではなかった。

「許してやれよ雅也。聞いてようが聞いてまいが、健は従うしかないんだ」

雅也が広樹を睨んだ。

「広樹、おめえいつから俺に命令出来る様になったんだ？ああ？」

立ち止まった。辺りは夜の住宅街。人気はなかった。

「命令じゃない。意見だろ？そんな事も解らないのか雅也？」

広樹の口調に皮肉が混じる。雅也の眼光が鋭くなった。パンチングマシンで負けた事が尾を引いていたらしい。

雅也が広樹の胸ぐらを掴んだ。広樹は雅也の髪の毛を掴んだ。

「何熱くなってるんだよ、雅也？」

クールな広樹の声。キレ始めている証拠。

「何余裕ぶつてんだこら。広樹？」

怒鳴りに近い雅也の声。キレてる証拠だった。

二人が揉めるのはあの決闘以来初めてだ。俺は驚いた。

二人は睨みあつたまま膠着状態を続けている。

何故今更になつて？俺は考えた。

考えればすぐに解つた。広樹と雅也は仲が良くなつた訳じゃなかったのだ。お互いの憎しみを俺に転換する事で何とか衝突を避けようとしていた。衝突すれば最後、どちらかが死ぬまで殺しあふ。お互いの力量をお互いが理解していたから、死というリスクを回避する為に俺を利用していた。

俺によつて保たれていた均衡が崩れかけている。

俺が遠藤を殺すから？

違う。

遠藤を殺した俺をこいつらは殺すつもりなんだ。

下らない。何故今まで気が付かなかつた。広樹と雅也は遠藤に惚れていた。その遠藤が俺に惚れているんだ。俺が遠藤を殺したところで、許す筈がない。

俺を殺せば、俺というよりしろから解放された二人の憎しみは元の場所へ返る。広樹と雅也は、もうすぐ俺を失うという状況に無意識に戸惑いを感じて不安定になつていているんだ。

利用しない手はない。

頭の中で声が聞こえた。

広樹と雅也はそのまましばらく動かなかつた。二人を眺めた。少しだけ笑顔になれそうな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5192a/>

或る奇妙な友情

2011年1月4日00時52分発行